

## 感情に關する諸問題（前承）

千葉胤成

### 十

感情の本質、起源、價值等の問題は感情の理論として勿論重要ではあるが其性質上寧ろ哲學的考察に傾かざるを得ぬ。心理學的考察の問題として、一方には諸々の特殊問題に直接の影響を有し、他方には純粹理論的考察に寄與する所あるものは實に感情の根本方向に關する問題である。

抑も簡單なる感情の根本性質に關しては古來諸種の説がある。吾人は之を精力説、生物學的若くは生理學的及心理學の見解の三つに分ち述ぶることが出来る。先づ精力説と云ふのは感情を以て有機體の精力の増減なりとし、之を快不快の二つに分つものである。ハミルトンが快は精力増加の能力の障礙なき活動の反射に過ぎずとせる是である。其他オストワルトが有機體に於ける精力の促進及障礙はこゝ

に快不快として感ぜられ、快は精力を所有することにあらずして過剰の精力を使用することなりとせる。又ツェルネルが潛勢的勢力が活動的精力に移るときは快を生じ其反對なるときは不快を生ずとせる皆同様の考である。唯ツェルネルは此考を更に無機體にも許して居るやうである。次に生物學的若くは生理學的見解とは有機體又は個體の生活促進及障礙より快不快を説明せんとするものであつて、スペンサーが快不快は有機體にとり有用又は有害なる作用の對立現象なりとせる是である。カントは感情は認識と異なる自己意識の状態なることを力説し、前述の如く満足は生活の促進苦痛は生活の障礙なりと云ひ、ペインも快不快は全體若くは一部の生活作用の増加若くは減少に伴隨すとして居る。更に又之を或器官に歸するものがある。例へばレイマンは快は或器官が其活動間の精力の消費が營養活動を補充し得る度を超えざる限り生ずるものなりとし、マイネルトに至りては快不快を大脳皮質の營養の關係に歸して居る。終りに心理學の見解には亦種々のものがある。ライブニッツの如きは快は吾人或は他人に就ての完全の感覺なりとして之を感覺に歸し、マッハ、ミュンステルベルヒに至りては快不快を以て伸張及屈曲運動に關係して説明せんとした。又ウオルフは感情は身體狀態の直觀的認識にして其完全不完全により

快不快を生ずとして居る。更に又之を意志に歸するものも少くない。ハルトマンは感情は意志より生ずとし快不快は意志の満足及抑壓であり而して意志の緊張力が生活力に變移するときは快を生じ生活力が緊張力に蓄積するときは不快を生ずとして居る。ニ―テも快不快は意志が力となりしものにして即快は力の積極的感情不快は意志が力に移ることを禁止することより起るとした。又パウルゼンは「意志の原形を盲目的衝動としそは感ぜられたる急迫として意識に現はる、而して其急迫が遂行さるゝとき生活々動は快の感情を生じ生活々動の禁止は不快の感情を感ぜしむ、故に凡の感精興奮は同時に積極的消極的意志興奮である」と云つて居る。然るに意識全體に關係せしめて快不快を説明せんとして居るものがある。即フエヒネル及カスバリは快は内部一致或は意識の調和に基くとし、ウルリッテは感情は心的生活の促進及禁止又は調和不調和に密接なる關係を有すとして居るやうである。

以上述ぶる所によりて之を見れば感情の根本方向につき明言したものはないが、其説明の根據立脚地の種々異なるに拘はらず何れも快、不快の一方方向と思惟せるや明かである。されど是等は勿論必ずしも簡單なる感情のみに限らず複雑なる感情に就き觀察した所を言表せるもの少くない。故に眞の意味に於ける一方方向説と

同一に取扱ふことは出來ぬ。

## 十一

上述の如く感情の方向に關しては從來唯莫然快不快に限ると思惟せられ之につき何等の論争を見なかつたのである。然るにヴント出でて三方向説を唱導してより學者の之に反對する者少からずあり多くは寧ろ一方向説を持する如き状態にはあるがなほ未了の問題として學者の感情に關する論争の重大なるものゝ一である。ヴントによれば一定の性質強度を有する刺激を感情の反應の活潑なる感官例へば嗅官味官等に與ふるときは明かに二つの根本形狀あるを認むることが出来る。快不快即是であつて其中間に捨點存する。例へば最初冷却されたる觸官の溫度を適當に高むる場合の氣持よき暖かさ、餘り努力せずに仕事をなす場合の筋肉の興奮弱く皮膚を刺戟する場合の幽かなる痒感、餘りに永く又は強く働く場合は別としてエーテルや芳香の類の嗅及味覺の中甘等は吾人に一種の感情を喚起し而して其感情は性質上種々區別し得るものではあるが何れも快の語によりて包括し得る所のものである。然るに又他方に於ては皮膚に於ける強き暖、冷、痛覺、疲勞を起すほどの筋

肉の興奮不愉快にして嘔吐を催す如き嗅覺、味覺は快に對立する如き共通の性質を有し吾人は之を不快と名く、即吾人若し直接の經驗に訴ふるときは明かに快不快の相反する感情の存するや疑ふを得ぬ。然るにこは劣等感覺の範圍に於ける場合であるが高等なる視覺聽覺の範圍に於ては快不快に包括すべからざる一種の感情が存する。例へば明暗に伴ふ感情の如きである。然れども、多くの場合明には快の感情結合し暗には不快の感情結合するを常とすれど如上の感情の對化は純粹なる色彩印象を用ゐるときは一層著しく且快不快の感情の混合なしに現はるゝを見るこゝとが出来る。例へば暗室にありて先づスペクトラムの赤色を見次に青色を見るときは兩者は共に喜ばしき従つて快感を喚起する印象とせざるを得ぬ。同時に又兩者は全く異なる感情を吾人に喚起し而してそは多少の特色は存するも殆んど明暗の場合に應ずる如きものなるを知ることを得。此感情の對立は興奮、沈靜の語を以て表はすを適當とする。かゝる對比は又高音と低音或は強音と弱音とに於て表はるを見ることが出来る。然るに感情は通例簡單なる状態として現はれずして吾人の精神生活に於て極めて複雑なる結合をなし吾人の日常の生活殊に皮相的なる心理學的觀察に於て純粹知的と考へられて居る精神作用も實際には常に又主觀的

感情を伴隨するものなることを認むることが出来る。是上述の快不快又は興奮沈靜に歸すべからざるものであつて其割合に純粹なるものは適當なる注意の緊張期待の場合に見ることが出来る。例へば適當なる注意の緊張を以て遅きメトロノムの音を聞くに際し一打撃音より他打撃音に至る間隙に於ては吾人が緊張、感情と名け得べき状態を惹起し豫期せる打撃音來るときは茲に反對の感情を解發する。而してこは弛緩の感情と名くることが出来る。此の如くして感情の全系統は三延長の多様性よりなり其各は二つの相反對する方向を有する。而して其各は又他の二延長に屬するものと結合することが出来るとして居る。是所謂ヴェントの感情の三方向説である。然るに彼は唯に内省により獨斷的に決定せるものにあらずして此三方向は情緒の根本標型を明かにするに必要なことをとき次に又表出法によりて得たる客觀的論證を持來りて其確實なることを證せんとした。なほ又彼は更に感情の三つの屬性たる強度性質及繼續に結付けて快不快を性質に興奮沈靜を強度に緊張弛緩を續繼に相應せしめて居る。

ザントの此三方向説現はるゝや之に反對する者少くない。而して就中精細なる論評を試みたのはテイチナーである。次に其論點の大要を述べやう。テイチナーは先づザントの三方向説は科學的理論を述ぶるに當り論理的構成を缺くものであるとして居る。即ザントによれば吾人の感覺的經驗は強度、性質及繼續に於て變化し而して此の如き變化は感情の範疇に相應ずとせるが果して然りとせば感覺的經驗の空間的屬性に應ずるもの亦感情中に存しなければならぬ。而してこれは問題である。次に彼は性質上の關係をとぎ、快不快は名に於ても性質に於ても反對であるが弛緩は緊張の反對にあらず寧ろ緊張の最小點或は零點である。又興奮の反對はザント自身已に或は沈靜と云ひ或は靜穩と云ひ或は禁止と云ふ。而して是三者は皆異なれる經驗である。故に興奮、沈靜及緊張、弛緩は快不快と同列に置かるべき性質のものでないと云ふにある。テイチナーはなほ之に止らず更に所謂双對比較法によりてせる研究の結果を概括してザントの實驗の結果を駁撃して居る。(双對比較法と云ふのはメトロノームの種々の速さの音を聞き一が他よりも快又は不快或は興奮又は沈靜、緊張又は弛緩なりてふ判斷の數をとり横軸に其メトロノームの音の速度順を排列し縦軸に其に應ずる是等主觀的判斷の回數を記録し此の如くし

て快、興奮等の曲線を得る方法を云ふのである。曰く、先づ第一に興奮沈靜、緊張弛緩を表はす曲線は常に快不快と同一である。加之異なる観察者は是等の語に異なる説明を興へて居る。若しも興奮が心配、神經興奮の意なるときはそれは不快に一致し熱心、豫期的興奮の意なるときはそれは不快に一致する。同様に弛緩も愉快なる休息の意なるときは快に一致し失意落膽の意なるときは不快に一致する。彼は此の如く客觀的には曲線の進行に何等新しき感情の方向の存在する證を有せず。又觀察者の内省に訴ふるも曲線の客觀的證明を更に確實にするものありとし遂に興奮沈靜緊張弛緩は常に快不快の感情と有機感覺との複合に過ぎずと結論するに至つたのである。

### 十三

然るに茲に又ロイスは感情の二方向説を唱へて居る。其大要は次の如くである。從來感情は多く快不快の二つとせられて居るが此二元説の疑ふべき點は甚だ多い。吾人の經驗によれば快不快以外のもの存する。例へばすねて居る小供は其氣分の苦痛を受くるもなほ幾分快に向ふ傾向を有する。不平家も其悲は何等かの理由に

より何時なりとも愉快に轉ぜしめ得べきを知るにより其懊惱を拒むことが出来る。又闘技者軍人等は苦痛を好むにあらざるにも拘はらず苦痛を含む地位を選む點に於て皆一致する。即所謂不快は二つ以外の他の傾向を含むことを示して居る。かくて彼は云つて居る。『余は固よりセントの三方向説或は更に多くの方向を唱ふる説の正しきや否やを證することは出来ぬが少くとも明かに區別され割合に獨立なる二方向の存することを假定せんとするものである。而して各は又互に相反對する感情の性質を含んで居る。即一は快と不快 (Pleasantness, unpleasantness) にして他は不安と安靜 (restlessness, quiescence) である。』彼によれば不安と安靜とは内省により容易に觀察し得れど又吾人が如何なる運動をなし居るかを吾人に知らしむる感覺的經驗と混雜し易きものである。併し吾人は不安の感情と云ふときは吾人が實際行ふ運動の感覺的經驗を意味せず吾人の經驗をして瞬間的不満足の對象たらしむる吾人の經驗の價値の感情を意味し之に反し安靜の感情は満足てふ語と聯想さるゝ如き感情を意味するものにあらずそは時として痛たるを得るものである。即是等の感情は二方向の何れか一に於て變化し得るのみならず四つの混合状態を現出することが出来る。

先づ快不快について見るに快は生物の存在の状態を伴ふ如き感情である。即生物は作られ更新され略言すれば其瞬間生の高めらるゝ如き状態を伴ふものである。之に反し不快又は苦は生物が破滅するか生の低めらるゝ如き場合の感情である。次に不安と安靜とは吾人の意識に關係する感情である。即そは或特殊の運動の感情にあらずして吾人の機制に現はるゝ運動作用の變化に對する一般傾向の感情である。故に意識其者にありては是等の感情は吾人の意識状態の變化或は其時間的容相に關係するものである。(ゲントの説に於て興奮沈靜殊に緊張弛緩の感情が意識の時間的進行に關係すと云つて居るのは之に似て居る)。吾人が直接將來の變化に關係あるときは不安に關係し従つて期待、好奇心、恐怖、希望、未決等の情緒は殊に不安の感情の色彩を帯びて居る。安靜の感情は之に反し變化が著しからず又は其變化に何等意識的力與へられざる場合に現はれる。故に吾人は安靜の感情を以て過去を見る。宿命論と呼べるゝ複雑なる情趣は過去及將來のあらゆる出來事が通例過去を考ふるとき主として現はるゝ沈靜の感情により見らるゝ所の情趣である。又此感情は吾人が睡眠せんとするとき及永き身體的抑制を受くる際現はれる。之に反して不安の感情は吾人が覺醒のとき又は蓄積されたるエネルギーが急激に解

發さるゝときに現はれる。通例能動的注意と呼ばるゝもの例へば故意に弱き音を聞くときの如き場合には不安の感情著しく現はれ之に反し所謂受動的注意の場合何か現在物を見るときに如き場合には安靜の感情伴ふものである。

次に混合感情は四つあり得る。即其一は安、靜、な、る、快、感、である。此は殊に通例不滿に對する滿足と呼ばるゝ場合に相當する。又それは現在の判斷に關係する限り吾人が有する最も明かに滿足なる種類の感情である。其二は不、滿、な、る、快、感、である。こは愉快なる現在の性質を有し、他方に於ては明かに不滿なるものである。前述の二元説は此感情に一定の地位を與ふことが出来る。快が吾人が願ふ感情状態なりとすれば吾人が之を有するとき何故に其に満足しないのであるか。而かもかゝることは吾人の能く知る所である。其三は痛、と、不、安、と、の、結、合、である。吾人の經驗によれば生物が自由に其エネルギーを減少せる限り又現在の情況が多少生物に有害なる限りそは苦痛である。二元説にありては此痛と不安との結合をば必然事と見、而して唯痛は現在の状態の性質なりとし不安は吾人が痛より逃れんとしてなす運動の感覺的經驗なりとして兩者を區別して居る。吾人の見解に於ては不安と痛とは全く區別され、而して兩者は何れも感情の世界に屬し決して其一が他に依囁

するものではないのである。其四は苦難と安靜との結合である。こは必ずしも不快にあらず、それはグンドが沈靜の感情と名けたるにても明かである。而して或時は苦難主たり或時は安靜主たるものである。以上は混合の凡の場合であるが一系統主となり他系統はために消失して見ゆる如き場合も存する。

#### 十四

感情の根本方向が多なりや一なりやに關する是等の説の何れが正當なりや未だ俄かに斷ずることが出來ぬ。元來グンドが感覺感情の兩要素を對立せしめたること或は對立せしめたりと思惟すること已に誤である。従つて感情の屬性を感覺のそれに應せしめやうと試みたるは甚だ形式的にして不自然なる考と云はなければならぬ。又テイチナ一の指摘せる如く快不快と他の二方向とは全然其趣を異にすることは到底之を拒むことが出來ぬ事實である。加之弛緩は緊張の反對ならず興奮の反對亦沈靜なりと云ふを得ない。兎も角興奮沈靜及緊張弛緩はしかく單純なるものではないやうである。即グントの所謂三方向説は稍々形式に拘泥する如き觀なきにあらざるも其客觀的表徴に就ての所論は實驗上の根據を有するものがあ

る。テイチナ一の見解は吾人を首肯せしむる所多いが所謂双對比較法は方法として稍々精確を缺くの憾がある。更にロイスの二方向説に關しては其不安及安靜の感情なるものは寧ろ複雑なる感情であつて結局快不快に歸せしめ得ざるにあらざるかを疑はしむるものがある。吾人を以て之を見れば將來精確なる方法の發見せられ周到なる觀察の堆積せらるゝに至らば必ずや一方向説の正當なるの證せらるゝ時あるであらうと思はれるが現今に於ては唯少くとも快不快を他の感情の方向と同列にをくの不當なるを云ひ得るのみである。而して暫く快不快につき考察し他は暫く疑問として存置するの妥當なるを覺ゆる。他の學者も三方向説には疑を存し快不快説をとる者多いやうである。かのエッペンゲハウスの如きも根本感情として快不快をあげ其強度又は感覺知覺との結合の結果種々の感情を生ずるも適意不適意満足不満足喜悅苦痛等の如く何れも相反對する双對をなすものとして居る。近時ミラー、フライエンフェルスは快不快其者は存在せずと稱しながら無數の感情は快不快の範疇の下にありとせる亦一方向をとるものと稱することが出来る。(或は快不快の語が不適當であるかも知れぬ。併し今其適當なる語を見出すことが出来ぬから假りに快不快と稱する)。扱て感情の根本方向として暫く快不快を考察すと

して此兩者の關係如何吾人は次に之に就て述べやうと思ふ。

## 十五

感情の根本方向を快不快として考察するに際し吾人は此兩者の關係が諸種の問題を喚起し來るのを見るのである。即快と不快とは同一か別異か。若し別異なりとすれば兩者は同様なる意味に於て相對立するや。又兩者は純粹に對立し混合することなきや否や。兩者の中間に無感情の點存するや否や。及兩者の極點は如何等是である。以下順次是等に就き考察しやう。

### (一) 快不快の同異

吾人の直接の經驗によれば快と不快とは明かに二つの異なる感情の状態なるが理論的には種々の考察を下すことが出来る。學者或は快と痛とを對立せしむるもの少くない。例へばリボー、サリーの如きである。リボーの如きは此誤れる見解よりして快痛に關する神經の有無につき論じて居るけれども痛は單なる感情にあらず感覺感情の結合である。快に對立する感情は之を不快と稱するが適當である。フライ等が快は痛なきことより成るとしたのも同様の誤より來たと見るべきであ

る。此の如く考ふるときは快不快の感情の對立は直接の經驗として疑を存しないやうである。然れども仔細に之を検するときにはなほ考察の餘地がないでもない。之を客觀的刺戟よりするも其刺戟の性質強度等により略々同一感情を喚起するも常に必ずしも然りと云ふことが出來ぬ。感受者の状態によりて種々の變異を來すのみならず主觀的状态より云ふも同一刺戟に對し同一條件の下に快は不快に不快は快に變移することがある。例へば嗅覺味覺の場合殊にアルコール煙草の使用等に於て之を見ることが出来る。即絶對的快又は不快は存在せず快不快も結局相對的差別たることを知るのである。ポニーニは云つて居る、快及痛は吾人には二つの反對にして相互矛盾せる現象の如く見ゆるが結局同じ性質の現象であつて唯其度を異にするものゝ如くである。即そは單に神經中樞に於ける興奮性の差異によるべく、二者は或は一範疇に或は他範疇に包含せしむることが出来る。茲に痛が不快の意なりとせばポニーニの言は正當なりと云ふことが出来る。勿論こは理論的にして實際的に兩者の別は經驗的事實たることを忘れてはならぬ。

## (二) 快不快の非相稱性

相對的意味に於て經驗上快不快の感情存すとして此兩者何れが多く存するか兩者

の分配の狀況如何。之に答ふことは頗る困難事に屬する。されど或個々の現象につき精細なる考究をなすときは其範圍内に於て多少の考察を施し得ることも出来る。例へば或感覺の範圍につき強度の増加減少に對する辨別性を檢するときには明かに増加の場合は減少の場合よりも辨別性大である。而して増加は不快を伴ひ減少は快を伴ひ而してそれは生存に不適當なる刺激は速かに辨別し適當なるものは辨別すること遲きより來て居るやうである。(之に關する實驗的研究の結果は他日公表しやうと思つて居る。)即此範圍内に於ては不快の感情は快の感情よりも多く現はると見ることが出来る。又ヅントは快の範圍は不快よりも貧弱なりとし此事を言語の表出を以て證せんとした。彼によれば言語は不快の感情情緒及其傾向に對し多くの言表を作つて居るが喜ばしき情緒は僅小なる一般的名稱を有するに過ぎない。而して此現象は吾人が特に不快又は煩鎖なる状態を仔細に觀察すてふ事實よりは寧ろ快の感情は實際上一様性を多く有すてふことより起る。これは殊に感覺感情の場合に明かである。例へば痛は唯に多くの階段を有するのみならず其場所位置に従ひ無數の段階を有して居るが如きである。然るにマンテガツァは快に關する語を集めヅントに反對した。或はこは國民性の相違を示して居るのかも知

れぬ。リボトは實際に語の聚集をしなかつたが暗にヴントを賛したやうである。若し言葉が吾人の感情生活を如實に現はすものとせば之により吾人の精神生活に於ける快不快の非相稱性を斷ずることが出来るであらう。(漢字に就ても快よりも不快の方遙かに多いやうである)。リボトは又之に關聯して情緒状態の再現に於ける個人的相違が性格の種々の模型をなすに大なる役目を演ずるものなることを注意して居るが個人により亦相違あるべきは勿論である。唯實際生活の經驗に於ては矢張不快重きをなすやも知れず春帆は病夫歳晚可如何、二十餘年片夢過、點檢囊中三百首、説歡甚少、説悲多と詠つて居るが獨り詩人の驢語のみではないのであらうと思はれる。併し全體として何れが主なるかの關係は現在に於ては之を斷定すると難く唯個々の現象に於て想見し得るに過ぎぬ。

### (三) 快不快の混合

前述の如く快と不快とは經驗上に於ては相反對する感情の状態であるから此相反對する二つの状態が同時に存在することありや、即快と不快とは混合するものなりやは頗る興味ある問題である。言表の上には『甘い悲み』又は『痛快』等のことをいふ。結局これは實驗の結果に訴へなければならぬ。而かも未だ確實なる論證あ

るを見ぬ。併し一見同時なるが如く見ゆるも繼起時間の短小なるに過ぎざることがある。かの兒童が泣き悲むかと思へば嬉々として笑ふが如き其例である。但し初生兒の表出を以て其感情状態を推することが出來るとすれば快と不快と一步の差に過ぎざるが如くも考へられる。加之泣く顔と笑ふ顔とは甚だ酷似して居る點がある。併し吾人は今日に於て混合如何の問題に答ふることは出來ぬけれども寧ろ急激なる變移と見る方が穩當であるやうである。

#### (四)感情の無關心

感情の中性の状態即無關心なるもの存するや否やに就ては學者間に肯定否定の兩説がある。リボーは云つて居る。『心的要素は其何れが主なるかによりて呼ぶものであつて實際には悉く包含せらるゝものである。而して知覺の明瞭なるほど情調に弱く情緒の強きほどそれを喚起せる知的要素は弱めらるゝものである。併し弱小は決して消失を意味するものにあらず所謂感情の中性状態存すと見ゆるも心的生活の根本要素の一が間歇的に存したるやも知ることが出來ぬ』と。之によれば彼は感情の中性點の存在を拒んで居るやうである。彼は更にブイエの説を攻撃して執拗に自己の生活の細點を注視する憂鬱病者は多くの人の看過しつゝある内部生活

作用を感じずることを以て中性の存在を否定して居る。然るに之に反し其存在を肯定する者少なからずある。

セルジは之を以て一定の生理條件の必然の結果と思惟して居る。即快と不快とは二つの感情の根本形式即感情の兩極端であるからして其中間に完全なる順應の状態に應ずる中性線存しなければならぬ。不快は生物が外界の力との争を表はす意識状態にして一が他に對する順應の缺如を表はし従つて精力の消失を意味する。之に反し快は生物の反應が外部の興奮と結合せることを明かにし従つて生活力の昂進を表はす所の意識状態である。而して無差別は生物が常恒及無化する強度に對する完全なる順應を表はす意識の中性状態である。換言すれば生活力の増減なく而かもそれを保存し平衡の状態を生じ意識に快も不快も起ることなきものである。ダントは此現象を幾何的線を以て表はして居る。即横線の上は積極値を表はしそれは快に應じ其下は消極値を表はしそれは不快に應じ横線と合する點は中性又は無差別に應ずとした。レーマンも弱き感覺は感情の中性状態を現ずることを許して居る。ホルウイッ觀察を始めレーマンが之により實驗を施せる結果によれば指を水中に入れ二分二十秒間に其温度を三十五度より五十度上昇せしむるに始は快き

暖さを感じそれより軽く不快なる刺衝を感じ時々休止し遂に痛を感じずるやうになる。これは中性點の存在を示すと同時にヴントの快より中性點を通して不快に移行すとの結論に對し證明を與ふるものと云ふことが出来る。キルペの如きも中性點の存在は殆んど疑ふことが出来ぬと云つて居る。

感情の中性點の存否に關しては此の如く積極消極兩説存すれども其純粹なる状態に至りてはリボーの主張したやうに存在せず、吾人が見て以て中性となしたる場合にも多少の快又は不快の感情の存在せずと斷ずることが出来ぬ。されどレーマシの實驗によれば其存在は想見せらるゝのみならず理論としては其存在を認容するを可なりとすべきである。かの禪定の状態の如き之に近きものなるやも知れず。但し其確實なる論證は之を他日に俟たなければならぬ。

#### (五) 感情の兩極

感情は快不快よりなり其間に中性點の存すること前述の如くである。然らば快不快の極點は如何なるものであるか。これは實驗的論證を試むること殆んど不可能であり従つて確實なる答解を得ること難いのであるが幾多の經驗は多少其一斑を想見せしむるものがある。かの痛の極何等の感なきに至るが如き其好例である。

感情の激昂の極度に達するときは殆んど無關心に似たる状態となり更に其反動として反對の表情を現はすことがある。歡樂極りて哀情多しと云ふことがあるがかの歡喜の餘り遂に涕泣するに至り又は悲哀の極一種愉快を覺ゆるは吾人の屢々經驗する所である。

## 十六

上來吾人は感情の意義及其根本方向に關し考察したのであるが次に其分類及研究法に就き略述しやうと思ふ。

感情の第一の特徴はそれが統一的なるにある。レモンデモンの云つたやうに快不快に關する科學にありては他の科學に於けると異なり相離れたる器官又は作用の現はれにあらざしてあらゆる器官あらゆる作用に屬するものである。されば之を分解抽象して其分類を試むることは頗る困難のことに屬する。扱て古來分類の根據によりて種々の範疇を生じて居るが其重なるものは凡そ次の四つである。

(一)實際の具體的現象より分類を試むるものであつて綜合的、分類とも名くべきものでありベイン、リポールの如き之に屬する。

(二) 發生學的見地より諸種の感情を比較分類するものであつて、比較的分類とも名くべく、メルシエ、シャンドの如き是である。

(三) 情的要素を伴ふ知的作用の状態により分類するものであつて、知的分類とも名くべきものである。ワイツ、ドロービヒ殊にナィロフスキ之に屬しレーマンも亦之に屬すと見ることが出来る。

(四) 元來上の知的分類の影響を受けたるものであるが感情状態其者の觀察より分解対象を試み分類するものであつて、分解的分類とも名くべきものである。ゼント、エッペンゲハウスの如き是である。

以上の中第一の分類は實際的に便利なるのみならず特に複雑なる感情の研究を益することがあるけれども簡單なる感情を組織的に研究するに適して居らぬ。又第二の分類は所謂劣等感情の研究に役立つ發生學的興味を有する點に於て優つて居るが人間の普通意識を研究するに充分なりと云ふを得ぬ。更に第三の分類は明瞭にして概念を得るに極めて便であるが餘りに形式に陥り易く自然の感情状態を研究するに不適當なる所がある。獨り第四の分類に至りては自然の意識現象としての感情をば分解対象して分類するものであるからして感情の科學的研究を全う

する上に於て最も其宜しきを得たるものと云ふべきである。

如上の見地よりして感情を分類するときは凡そ次の如くなるであらう。先づ大別して二とすることが出来る。即ち一は簡單感情で他は複雑感情である。簡單感情はそれが結合して複雑感情をなすものであつて感情の根本的狀態をなし其純粹なるものは現出すること殆んどないのであるが其之に近いものは感官感情の際に之を認むることが出来る。此の如きは特に之を感官感情と名ける。これはあらゆる感覺の範圍に於て之を見ることが出来るが特に研究に都合のよいのは聴覺及視覺の範圍である。次に複雑感情は簡單感情の結合よりなるものであるが其結合の關係よりして分れて二となる。一は結合同時的なるもので之を情縲と名ける。他は結合繼次的なるものであつて情緒、即是である。而して情緒の中其現出緩徐にして割合に永續的なるときは特に情趣を名けられる。情縲の代表的なるものは觀念に結合するものであつて之を觀念情縲と名け恰かも感覺に於ける感官感情の如く觀念に關係する。又情緒は意識の複雑なる結合に應ずるものであつて其知的感情の基礎をなす所のものは特に知的情緒と名けられる。更に進んでは種々高等なる意識作用に伴隨する複雑なる感情がある。之を情操と名ける。されど茲に至れば已に

感情の特質と云ふよりは寧ろ特別なる意識作用に關係するもので特殊の叙述を要するものである。

以上の如き分類は現今に於て最も穩當なりと思はるゝが感情に關する種々の問題を顧みるときはなほ之を以て満足することを得ず其完全なる分類は之を他日の研究の結果に俟たなければならぬ。最後に吾人は感情の研究法につき一言して以て此稿を終らうと思ふ。

## 十七

元來感情は吾人の意識生活中最も重要なる範圍なるにも拘はらず之が研究は他の意識の範圍に比し甚だ多くない。蓋し感情殊に複雑なる感情の研究には次の困難が存する。

(一)感情は之に注意することが出来ぬ。之に注意せんとすれば感情は已に消失し去るものである。

(二)複雑なる感情は之を實驗場裡に現出せしむることが出来ぬ。是れ研究の對象人類であるからである。

以上の困難の外更に感情の心理學的研究の發達を遅延せしめたる他の理由が存する。是心理學の歴史である。即心理學の實驗場に於て先づ攻究せられたる題目は物理學、生理學、星學により暗示せられたるものであつて精神測定の問題、感覺の性質、種類及それが感官に對する關係及精神作用の繼續の問題等であつた。夫故に學者未だ思を自己内部の意識狀態に致すに邊なかつたのである。恰かも古代哲學が先づ世界の本質等の問題に起り近世に至り漸々主觀の研究に向ふに至りしと其趣を同じくするものがある。勿論新しき意味に於て客觀の研究の重要な意義を有する如く從來と異なる意味に於て所謂意識の客觀的方面の研究は今日なほ依然として其意義を有するのであるが所謂主觀的方面即感情の研究のなほ重要なを思ふのである。されば近時感情殊に其表出に關する研究に従事するもの漸く多きを加ふるやうであるが未だ群聚せる諸種の問題に對し確然たる學説を確立せるものを聞かぬ。併しこは偏に研究法の未だ不完なるに職由するものであつて將來大に見るべきものがあるであらうと思はれる。

扱て感情の研究法は他の意識現象に於けると同じく之を二大別することが出来る。觀察及實驗是である。先づ感情の實驗法につきては亦之を二大別することが

出来る。一は印象法で他は表出法である。印象法とは外界より或刺激を興へそれにより被験者に如何なる感情現出せるか又は如何に感情が變化せるかを報告せしむるにある。テイチナーはコーンの双對比較法をとり來り所謂感情曲線によりて感情的反應の個人的相違を測るに適當すとして居るが亦印象法中の重要なものと云ふことが出来る。又表出法は被験者の意識内に起れる或感情の經過が如何なる身體的變化を生ぜしかを記録するにある。感情の實驗的研究法として屢々用ゐらるゝ所である。此の如く感情の實驗的研究法には印象法と表出法とあるが研究の完全を期せんとするには此兩方法を適當に結合するにある。蓋し身體表出の示す所は觀察者の内省の報告に對する客觀的規正者となり又内省は其客觀的記録の説明者となり得べきを以てである。

更に觀察法に至りては他の意識現象と異なり直接たることを得ぬ。自己の感情状態の觀察と雖も直接に遂行する能はざるは感情の性質上亦止むを得ざる所である。然れども感情に對し觀察法はそれが實驗法を施行するの困難存するより一層他の意識作用に比し重要なるを感ぜざるを得ぬ。

附言 以上吾人は感情に關する重要なる諸問題につき考察したのであるが個

々の問題につき更に深き考究をなすことは極めて興味ある事である。併し今は之を許さぬ漸次研究の歩を進めて發表しやうと思つて居る。引用書目を故意に除いたのは一は此理由により一は煩を避けんがためである。